# 外国人患者受入れ医療機関認証制度認証病院における看護師の異文化間看護能力の影響要因
## ―国際看護学の学習経験に焦点を当てて―

Factors affecting Cultural Competence in Nursing in a hospital accredited by Japan Medical Service Accreditation for International Patients focusing on Learning Experiences in International Nursing

○香川沙由理[1]，只浦寛子[1]
Sayuri Kagawa, Hiroko Tadaura
1　国際医療福祉大学大学院
International University of Health and Welfare Graduate School

**【背景と目的】**

国内の国際化は急速に進み、多種多様な文化背景を持つ外国人に関わる機会が増えてきている。日本政府は、国家成長戦略のひとつとして訪日外国人旅行者数の目標値を引き上げている。在留外国人数も増加傾向にあり、2019 年には過去最高となっている。留学生、技能実習生、外国人看護師・介護福祉士候補者の受入れなどを通してさらなる在留外国人の増加も予測されている。安心・安全に外国人が医療サービスを受けられるよう外国人患者受入れ医療機関認証制度(Japan Medical Service Accreditation for International Patients、以下 JMIP とする）が 2011 年に創設され、普及が推進されてきた。また 2007 年以降、国際看護に関する教育が取入れられ、文化の多様性を考慮した看護ケアが求められるようになった。しかし、国際看護学または異文化と名の付く学問の授業または研修や実習経験（以下、国際看護学とする）、外国人患者に対する感情、倫理観が異文化間看護能力に影響しているかどうかは明らかにされていない。本研究は、国際看護学の学習経験の有無に焦点をあて、JMIP 認証病院における看護師の異文化間看護能力の影響要因を検討することを目的とした。

**【方法】**

2017 年厚生労働省の調査報告で外国人患者受け入れ実績が最も多い地域医療支援病院かつ、JMIP の認証率の最も高い関東地区の医療機関で、立地性やアクセス、外国人を連日受け入れている JMIP 認証を受けた 1 施設を調査施設とした。休職者を除く常勤看護師全員に異文化間看護能力尺度（杉浦，2003）を含む自記式無記名質問紙を送り、回答用紙の返送をもって研究同意とみなす郵送法を実施した。解析は Shapiro-Wilk 検定、Mann-Whitney の U 検定、カイ二乗検定を行い、多変量解析を行った。従属変数は異文化間看護能力、独立変数は個人属性、看護以外での異文化の知識・技能・経験、外国人患者への看護経験の 10 変数とした。倫理的配慮は、国際医療福祉大学研究倫理審査委員会の承認（承認番号 18-Ig-161）、調査施設長の書面同意を得て実施した。

**【結果】**

看護師 765 名に配布し、回収 301 名（回収率 39.3%）、有効回答 286 名、国際看護学あり群 107 名、なし群 179 名であった。異文化間看護能力尺度得点比較では、国際看護学あり群が、異文化間看護能力と下位尺度の接近―回避の傾向、異文化間看護の技能の得点が高く、有意差がみられた。データは正規分布していず、ロジスティック回帰分析（強制投入法）の結果、外国人患者への看護経験に対する喜びの感情のみが関連していた（オッズ比：1.520、95%信頼区間：1.300−1.778、p=0.001）。

**【考察】**

異文化間看護能力に対する外国人患者への看護経験に対する喜びという感情が関連しており、そのオッズ比は 1.52 倍であった。看護は感情労働であるとされており、人が必要とし望んでいることに深い関心を持ち、優しさと思いやりを込めて手を差し伸べ、それにこたえることであるとされ、看護における相互作用には情動的要素が含まれている。人の情動・感情は大きく 8 つに分類されることが報告されており、その中でも喜びという感情は、患者のニードが満たされた際に看護師が自分の存在意義を認識することで得られる感情であることが報告されている。異文化間看護能力は、クライアントの文化を尊重し、医療・看護文化および看護者自身の文化とクライアントの文化との狭間で効果的にケアを提供する能力とされており、この看護過程には看護師の情動・感情がかかわっていると言える。国際看護学の学習経験の有無は、異文化間看護能力尺度の下位尺度である異文化間看護の技能には一部影響していたが、総合得点である異文化間看護能力尺度には感度が低い可能性が示唆された。国際看護学については、その定義を再検討のうえで、縦断的実測や連続変数によって今後改めて検証する必要がある。一方、国際看護学の看護教育においては、学習者の喜びの感情・情動に着眼する教育的視点が重要である可能性があり、実際に、喜びの感情認知から、自他を意識した行動へと繋がっていく構造が臨床看護師の成長構造にみとめられることも先行研究で報告されている。

**【利益相反】**

本研究について開示すべき利益相反（COI）はない。

**【文献】**

杉浦絹子.（2003）. 異文化間看護能力の現状と規定要因−青年海外協力隊看護職帰国隊員と公立総合病院勤務看護職の比較より−. 日本看護科学会誌, 23(3), 22-36.